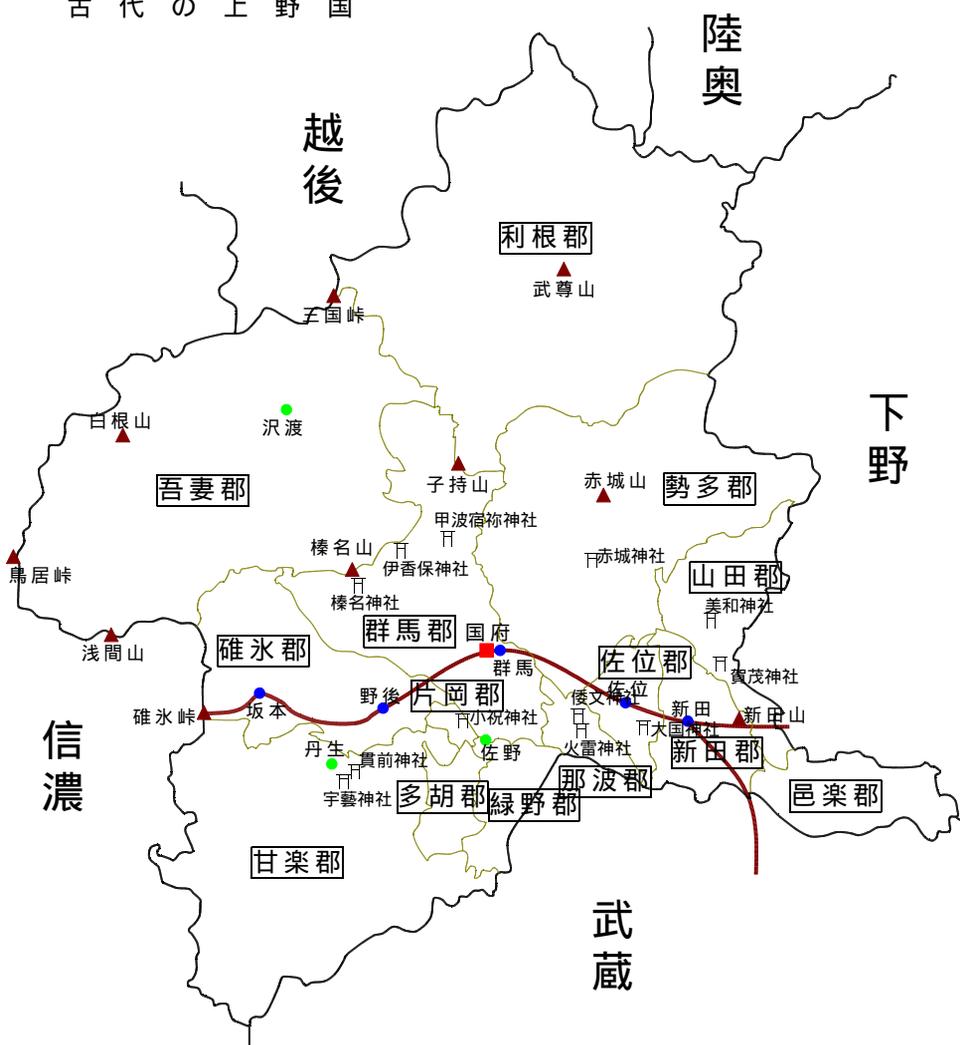


古代の上野国



郡界は寛文八年（1668）の上野国郷帳の村名に基づき推定した。

一、伝承の時代

活目尊を立てて、皇太子としたまふ。豊城命を以て東を治めしむ。是は上毛野君・下毛野君の始祖なり。日本書紀崇神四八・四・一九

《参考》

上毛野国造

瑞籬朝（崇神）、皇子豊城入彦命の孫、彦狭島命、初めて東方十

下毛野国造

難波高津朝（仁徳）の御世、元の毛野国を分かちて上下となす。豊城命

の四世の孫、奈良別を初めて国造と定め賜ふ。

（中略）

那須国造

日向日代朝（景行）の御代、建沼河命の孫、大臣命を国造と定め賜ふ。国造本紀

即ち近き県の卒を発して、上毛野君の遠祖八綱田に命せて、狭穂彦を撃たしむ。日本書紀垂仁五・一〇・一

是に、日本武尊の曰はく、「蝦夷の凶しき首、咸に其の辜に伏ひぬ。唯信濃国・越国のみ、頗未だ化に従はず」とたまふ。則ち甲斐より北、武蔵・上野を転歴りて、西碓氷坂に登ります。時に日本武尊、毎に弟橘媛を顧びたまふ情有します。故、碓氷嶺に登りて、東南を望りて三たび歎きて曰はく、「吾嬬はや」とのたまふ。故因りて山の東の諸国を号けて、吾嬬国と曰ふ。日本書紀景行四〇年は歳

彦狭島王を以て、東山道の十五国都督に拜けたまふ。是豊城命の孫なり。然して春日の穴昨邑に到りて、病に臥して薨りぬ。是の時に、東国の百姓、其の王の至らざることを悲びて、竊に王の戸を盗みて、上野国に葬りまつる。日本書紀景行五五・二・五

是に、天皇、阿直岐に問ひて曰はく、「如し汝に勝れる博士、亦有りや」とのたまふ。対へて曰さく、「王仁といふ者有り。是秀れたり」とまうす。時に上毛野君の祖、荒田別・巫別を百済に遣して、仍りて、王仁を徴さしむ。日本書紀応神一五・八・六

《参考》

左中弁正五位上兼木工頭百濟王仁貞……ら表を上りて言さく、「……軽嶋豊明朝に御宇しし心神天皇、上毛野氏の遠祖荒田別に命せて、百済に使用して、有識の者を捜し聘はしむ。……」とまうす。続日本紀延暦九・七・一七 790

新羅朝 貢らず。夏五月に、上毛野君の祖竹葉瀬を遣して、其の闕貢を問はしめたまふ。是の道路の間に白鹿を獲つ。乃ち還りて天皇に献る。更に日を改めて行く。俄ありて、且重ねて竹葉瀬が弟田道を遣す。日本書紀仁徳五三

蝦夷、叛けり。田道を遣して撃たしむ。則ち蝦夷の為に敗られて、伊時水門に死せぬ。時に従者有りて、田道の手纏を取り得て、其の妻に与ふ。乃ち手纏を抱きて縊き死ぬ。時人、聞きて流涕ふ。是の後に、蝦夷、亦襲ひて人民を略む。因りて、田道が墓を掘る。則ち大蛇有りて、目を発瞋して墓より出でて咋ふ。蝦

夷、**悉に蛇の毒**を被りて、多に死亡ぬ。唯一人免るること得つらくのみ。故、時人の云はく、「**田道**、既に亡にたりと雖も、遂に讎を報ゆ。何ぞ死にたる人の知無からむや」といふ。日本書紀仁徳五

武蔵国造笠原直使主と同族小杵と、国造を相争ひて、使主・小杵、皆名なり。年経るに決め難し。小杵……密に就きて援を上毛野君小熊に求む。而して使主を殺さむと謀る。使主覺りて逃げ出づ。京に詣りて状を言す。朝廷臨断めたまひて、使主を以て国造とす。小杵を誅す。日本書紀安閑元・閏二二月

筑紫の穂波屯倉・鎌屯倉、……上毛野国の緑野屯倉、駿河国の稚贄屯倉を置く。日本書紀安閑二・五・九

二、飛鳥時代

新羅の間謀の者迦摩多、対馬に到れり。則ち捕へて貢る。上野に流す。日本書紀推古九・九・八 601

丹比小沢連国襲を遣して、有間皇子を藤白坂に絞らしむ。……守君大石を上毛野国に、坂合部葉を尾張国に流す。日本書紀斉明四・一一・一一 658

蝦夷叛きて朝せず。即ち大仁上毛野君形名を拜して、將軍として討たしむ。還りて蝦夷の為に敗れて、走けて墨に入る。遂に賊の為に困まる。軍衆悉に漏せて城空し。將軍迷ひて所如を知らず。時に日暮れぬ。垣を踰えて逃げむとす。爰に方名君の妻歎きて曰はく、「**懐きかな、蝦夷の為に殺されむとすること**」といふ。則ち夫に謂りて曰はく、「**汝が祖等、蒼海を渡り、万里を跨びて、水表の政を平けて、威武を以て後葉に伝へたり。今汝頼に先祖が名を屈かば、必ず後世の為に讎はれなむ**」といふ。乃ち酒を酌みて、強ひて夫に飲ましむ。而して親ら夫の剣を佩き、十の弓を張りて、女人數十に令して弦を鳴さしむ。既にして夫更に立ちて、仗を取りて進む。蝦夷以為はく、「**軍衆猶し多なりとおもひて、稍に引きて退く。是に、散けたる卒更に聚ひて、亦振旅ふ。蝦夷を撃ちて大きに敗りて、悉に虜にす。**」

日本書紀齊明九是歲 663

前將軍上毛野君稚子・間人連大蓋、中將軍巨勢神前臣詠語・三輪君根麻呂、後將軍阿倍引田臣比羅夫・大宅臣鎌柄を遣して、二万七千人を率て、新羅を打たしむ。日本書紀天智二・三 663

天皇、大極殿に御して、川嶋皇子・忍壁皇子……三野王・大錦下上毛野君三千……に詔して、帝紀及び上古の諸事を記し定めしめたま

ふ。日本書紀天武二〇・三 681
山ノ上碑



所在地 高崎市山名町山神谷
年代 天武十年（六八一）
材質 自然石輝石安山岩
高さ 一二〇センチ
幅 五〇センチ
厚さ 五〇センチ

【積文】

辛巳歳集月三日記
佐野三家定賜健守命孫黒売刀自此
新川臣児斯多々弥足尼孫大児臣娶生児
長利僧母為記定文也 放光寺僧

【訓読文】

辛巳の歳集月三日記す。
佐野の三家と定め賜ひし健守命の孫
黒売刀自、此れ新川臣の児斯多々弥
足尼の孫大児臣に娶ひて生める児、長
利僧、母の為に記し定むる文也。放光
寺の僧なり。

健守命 — 黒売刀自

長利僧

新川臣 — 斯多々弥足尼 — 大児臣

大三輪君・大春日臣 犬上君・上毛野君……車持君……下毛野君・佐味君
……池田君……凡て五十二氏に、姓を賜ひて朝臣と曰ふ。
日本書紀天武二一・一一・一一 684

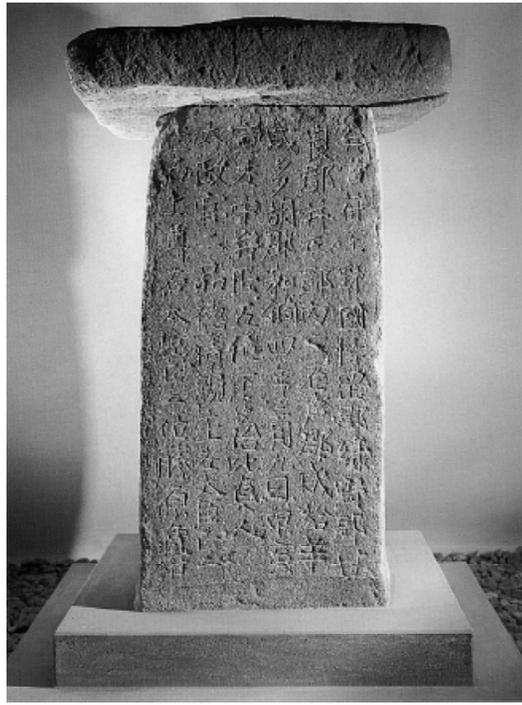
十の氏大三輪・雀部・石上・藤原・石川・巨勢・膳部・春日・上毛野・大伴・紀伊・平群・羽田
・阿倍・佐伯・采女・穂積・阿曇。に詔して、其の祖等の墓記を上進らしむ。
日本書紀持統五・八・一三 691

陸奥・越後の二国の蝦夷、野心ありて馴れ難く、屢良民を害す。是に、使を遣して遠江・駿河・甲斐・信濃・上野・越前・越中等の国を徴り発さしむ。左大弁正四位下巨勢朝臣麻呂を陸奥鎮東將軍とす。民部大輔正五位下佐伯宿禰石湯を征越後蝦夷將軍、内蔵頭從五位下紀朝臣諸人を副將軍とす。兩道より出でて征伐つ。 続日本紀和銅二・三・六 709

三、奈良時代

上野国甘良郡の織袋・韓級・矢田・大家、緑野郡の武美、片岡郡の山等の六郷を割きて、別に多胡郡を置く。 続日本紀和銅四・三・六 711

多胡碑



所在地 多野郡吉井町池
年代 和銅四年（七一）
材質 牛臥砂岩
(碑身)
高さ 一二五・五センチ
上幅 六〇センチ
下幅 六三センチ
(笠石)
高さ 二五・五センチ
軒幅 八八・五センチ

【釈文】
弁官符上野国片岡郡緑野郡甘良郡并三郡内三百戸郡成給羊成多胡郡和銅四年三月九日甲寅宣左中弁正五位下多治比真人太政官二品穗積親王左大臣正二位石上尊右大臣正二位藤原尊

【訓読文】
弁官の符に、「上野国片岡郡、緑野郡、甘良郡、并せて三郡の内三百戸を郡と成し、羊に給ひて、多胡郡と成す」とあり。和銅四年三月九日甲寅の宣なり。左中弁正五位下多治比真人、太政官二品穗積親王、左大臣正二位石上尊、右大臣正二位藤原尊なり。

勅して、尾張・上野・信濃・越後等の国の民二百戸を割きて、出羽の柵戸に配きたまふ。 続日本紀和銅七・一〇・二 714

《参考》 a・上野国緑 足

……米五石代 (秋田城跡木簡) * 緑野郡

b・上野国 進上(秋田城跡木簡)

相摸・上総・常陸・上野・武蔵・下野の六国の富める民千戸を移して、陸奥に配く。 続日本紀靈龜元・五・三〇 715

從三位中納言巨勢朝臣万呂言さく、「出羽国を建てて、已に数年を経れども、吏民少く稀にして、狄徒馴れず。その地膏腴にして、田野広 寛なり。請はくは、随近の国の民をして、出羽国に遷らしめ、狂 狄を教諭して、兼ねて地の利を保たしめむことを」とまうす。これを許す。因て陸奥の置賜・最上の二郡と、信濃・上野・越前・越後の四国の百姓各百戸とを以て、出羽国に隸かしむ。 続日本紀靈龜二・九・三三 716

始めて按察使を置く。……武蔵国守正四位下多治比真人県守は相摸・上野・下野の三国を管む。 続日本紀養老三・七・三三 719

陸奥国奏して言さく、「蝦夷反き乱れて按察使正五位下上毛野朝臣広人を殺せり」とまうす。 続日本紀養老四・九・二八 720

金井沢碑



所在地 高崎市山名町金井沢
年代 神龜三年（七二六）
材質 自然石輝石安山岩
高さ 一一〇センチ
幅 七〇センチ
厚さ 六五センチ

【積文】

上野国群馬郡下贅郷高田里
三家子孫為七世父母現在父母
現在侍家刀自池田君目頼刀自又児加
那刀自孫物部君午足次馱刀自次乙馱
刀自合六口又知識所結人三家毛人
次知万呂鍛師礪部君身麻呂合三口
如是知識結而天地誓願仕奉
石文
神龜三年丙寅二月廿九日

【訓読文】

上野国群馬郡下贅郷高田里の三家の子孫、七世の父母・現在の父母の為に、現在侍る家刀自、池田君目頼刀自、又児加那刀自、孫物部君午足、次に馱刀自、次に乙馱刀自、合せて六口、又知識に結べる人、三家毛人、次に知万呂、鍛師礪部君身麻呂、合せて三口、如是知識に結びて天地に誓み願ひ仕へ奉る石文。
神龜三年丙寅二月廿九日

外従五位下上毛野朝臣宿奈麻呂等七人、長屋王と交り通ふに坐せられて、並に流に処せらる。 続日本紀天平元・二・一七 729

遣陸奥持節大使従三位藤原朝臣麻呂ら言さく、「去りぬ二月十九日を以て、陸奥国多賀柵に到れり。鎮守將軍従四位上大野朝臣東人と共に平章ふ。且た、常陸・上総・下総・武蔵・上野・下野等の六国の騎兵、惣て一千人を追せり。……」とまうす。 続日本紀天平九・四・一四 737

坂東八国、并せて越前・能登・越後等の四国の浮浪人二千人を遷して、雄勝の柵戸とす。及、相摸・上総・下総・常陸・上野・武蔵・下野等の七国の送れる軍士の器仗を割き留めて、雄勝・桃生の二城に貯ふ。
続日本紀天平宝字三・九・二七 759

従四位下藤原惠美朝臣狩を東海道節度使とす。……その管れる遠江・駿河・伊豆・甲斐・相摸・安房・上総・下総・常陸・上野・武蔵・下野等の十二国、船一百五十一隻、兵士一万五千七百人、子弟七十八人、水手七千五百廿人を検定す。 続日本紀天平宝字五・一・一七 761

出羽国言さく、「蝦賊の余燼、猶平殄せず。三年の間に鎮兵九百九十六人を請ひて、且つは要害を鎮め、且つは国府を遷さむ」とまうす。勅して、相摸・武蔵・上野・下野の四国の兵士を差して発遣せしむ。 続日本紀宝龜六・一〇・一三 775

勅して、東海は相摸より以東、東山は上野より以東の諸国に、軍糧の糶十四万斛を乾し備へしめたまふ。蝦夷を征たむが為なり。
続日本紀延暦九・閏三・二九 790

四、氏族

上野国碓氷郡の人外従七位上石上部君諸弟、……ら、各当国の国分寺に知識の物を献る。並に外従五位下を授く。 続日本紀天平勝宝元・五・一五 749

飛騨国大野郡大領外正七位下飛騨国造高市麻呂、上野国勢多郡小領外従七位下上毛野朝臣足人、各当国の国分寺に智識の物を献る。並に外従五位下を授く。
続日本紀天平勝宝元・閏五・二〇 749

中衛員外少將従五位下田辺史難破等に上毛野君の姓を賜ふ。
続日本紀天平勝宝二・三・一〇 750

左京の人正八位上石上部君男嶋等卅七人言さく、「己が親父登与は、去ぬる大宝元年を以て上毛野坂本君の姓を賜はる。而るに子孫等の籍帳に猶石上部君と注す。理に於きて安からず。望み請はくは、父の姓に随ひて改め正さむことを欲ふ」とまうす。許す。 続日本紀天平勝宝五・七・一九 753

上野国甘楽郡の人中衛物部蜷淵ら五人に姓を物部公と賜ふ。
続日本紀天平神護元・一・一 765

上野国に在る新羅の人子午足等一百九十三人に姓を吉井連と賜ふ。
続日本紀天平神護二・五・八 766

上野国甘楽郡の人外大初位下礪部牛麻呂ら四人に姓を物部公と賜ふ。
続日本紀天平神護二・五・二〇 766

左京の人正六位上上毛野坂本公男島、上野国碓氷郡の人外従八位下上毛野坂本公黒益に姓を上毛野坂本朝臣と賜ふ。同じき国佐位郡の人外従五位上檜前君老刀自には上野佐位朝臣。 続日本紀神護景雲元・三・六 767

陸奥国宇多郡の人外正六位上勳十等吉弥侯部石麻呂に姓を上毛野陸奥公と賜ふ。 続日本紀神護景雲三・七・一九 767

従四位上外衛中将兼造西隆寺長官參河守勳四等伊勢朝臣老人、掌膳常陸国筑波采女従五位下勳五等壬生宿祢少家主、尚掃従五位上美濃真玉虫、掌膳上野国佐位采女外従五位下上野佐位朝臣老刀自を並に本國の國造とす。
続日本紀神護景雲二・六・六 768

(陸奥国)宇多郡の人外正六位下吉弥侯部文知には上毛野陸奥公。名取郡の人外正七位下吉弥侯部老人、賀美郡の人外正七位下吉弥侯部大成等九人には上毛野名取朝臣。信夫郡の人外從八位下吉弥侯部足山守等七人には上毛野鎌山公。新田郡の人外大初位上吉弥侯部豊庭には上毛野中村公。 続日本紀神護景雲三・三・一三三 78

上野国邑楽郡の人外大初位上少長谷部宇麻呂、甘楽郡の人竹田部荒当・糸井部表胡等十五人に姓を大伴部と賜ふ。 続日本紀神護景雲三・四・二六 769

左京の人從七位上田辺史広本等五十四人に姓を上毛野公と賜ふ。 続日本紀宝龜八・正・五 777

近衛將監從五位下兼常陸大掾池原公綱主等言さく、「池原・上毛野の二氏の先は豊城入彦命より出たり。その入彦命の子孫、東国の六腹の朝臣は、各居地に因りて姓を賜ひ氏を命せり。斯れ乃ち古今同じき所にして、百王不易なり。伏して望まはくは、居地の名に因りて住吉朝臣を蒙り賜はらむことを」とまうす。勅して、綱主の兄弟二人に、請に依りてこれを賜ふ。 続日本紀延暦一〇・四・五 791

五、地名・交通

・佐為評

・一斗 (飛鳥京跡木簡) * 佐位郡

・上毛野国車評

(藤原宮木簡) * 群馬郡

・大前里六…… (平城宮木簡) * 緑野郡大前里

・上野国甘楽郡新屋郷……

・上戸宋官部猪万呂養錢…… (平城京木簡) * 甘楽郡新屋郷

・上野国山田郡真…… (平城宮木簡) * 山田郡真張郷

(国力) 吾妻 (平城宮木簡) * 吾妻郡

(国勢多力) (平城宮木簡) * 勢多郡

六、産物

・邑楽 (郡力) (平城宮木簡) * 邑楽郡

太政官奏すらく、「武蔵国は山道に属ると雖も、兼て海道を承けたり。公使繁多くして祇供堪へ難し。その東山の駅路は上野国新田駅より下野国足利駅に達る。此れ便道なり。而るに枉りて上野国邑楽郡より五箇駅を経て武蔵国に到り、事畢りて去る日に、また同じき道を取りて下野国に向ふ。今東海道は、模国夷参駅より下総国に達るまで、その間四駅にして往還便近し。而して此道を去り彼に就くこと、損害極めて多し。臣ら商量するに、東山道を改めて東海道に属らば、公私所を得て、人馬息ふこと有らむ」とまうす。奏するに可したまふ。 続日本紀宝龜二・一〇・二七

・碓日評 (丁力) 大(少)丁

・鹿 (支力) 多比 (飛鳥京跡木簡) * 碓氷郡

・上毛野国車評桃井里大贅鮎 (藤原宮木簡) * 群馬郡桃井里

・大荒城評胡麻 (藤原宮木簡) * 邑楽郡

相摸・常陸・上野・武蔵・下野の五国の輸す調、元来是れ布なり。今より以後、^純布並に進らしむ。また、大倭・参河をして並に雲母を献らしむ。伊勢は水銀。…… 上野は金青。…… 続日本紀和銅六・五・一一 713

・上野国緑野郡小野郷戸主物部鳥麻呂戸中男作物鹿腊代雑…… (平城宮木簡) * 緑野郡小野郷

・上野国山田郡大野郷 (田後力) 里鴨部子 村輪押年魚大贅陸斤 天平八年十月 (平城京木簡) * 山田郡大野郷

・御馬司信濃一口甲斐一口上野二口右 (長屋王家木簡)

・四米四升五月二日 受板部 黒万呂

・馬司甲斐二人上野四人 六人

・米一斗十月十二日「大嶋」(長屋王家木簡)

『延喜式』に見る上野国の物産（印は特産）

【糸・布・敷物】 苧（カラムシの繊維）、麻、純、布、紺布、縹布、黄布、
縹布、椽帛（絹布）、紺帛、緋帛、黄帛、

【工芸・文具・食器】 席（ムシロ）、鹿革、履料牛皮（履物用の牛皮）、緋
革、膠（ニカワ）、樺皮、漆、筆、紙、櫛子（食器）

【動物】 馬

【染料・香料】 紅花、紫草、青木香

【医薬品】 黄芩（コガネバナ）、黄耆（オウギ）、細辛（ウスバサイシン）、
芍薬（シヤクヤク）、当归（トウキ）、升麻（シヨウマ）、防風（イ
ブキボウフウ）、銅牙、干地黄（ジオウ）、胡麻（ゴマ）、蜀椒（サ
ンシヨウ）、麦門冬（ジャノヒゲ）、附子（トリカブト）、猪蹄、杏仁（ア
ンズの種）、零羊角（カモシカの角）

七、万葉集東歌・防人歌から

《上野国東歌》

3402 日の暮に碓氷の山を越ゆる日は夫なのが袖もさやに振らしつ

碓氷の山をあなたが越える日は、あなたも袖をはっきりとお振りになりました。

3403 吾が恋は現在もかなし草枕多胡の入野の将来もかなしも

私の恋は今も切ない。そして（多胡の入野の奥ではないが）将来も切ないことです。

3404 上毛野安蘇の真麻群かき抱き寝れど飽かぬを何どか吾がせむ

上野国の安蘇の麻の束を抱きかかえるように、あなたを抱き締めて寝ても、それでもなお満足できない気持をいったい私はどうしたらいいのでしょうか。

3413 利根川の川瀬も知らず直渡り波にあふのす会へる君かも

利根川の浅瀬がどこなのかも考えずに、やみくもに渡って波を受けてしまったように、ばったりと出会ったあなたです。

3418 上毛野佐野田の苗のむら苗に事は定めつ今はいかにかにせも

上野国の佐野のたんぼの苗を使った占いで結婚を決めました。今さらどうにかできません（うか。できないでしよう）。

3420 上毛野佐野の舟橋取り放し親は離れど吾は離るがへ

上野国の佐野の舟橋をばらばらにしてしまうように、親は二人を引き離しますけれど、私はあなたと離れたりしませんよ。

3421 伊香保嶺に雷な鳴りそね吾が上には故はなけども子らによりてそ

伊香保の峰に雷よ鳴ってくれますな。私にとっては別にどうということはないのですが、あの娘が怖がるものでね。

3422 伊香保風吹く日吹かぬ日ありと言へど吾が恋のみし時なかりけり

伊香保風は、吹く日も吹かない日もあると言いますけれども、私があなたを思う恋心ばかりは、止むときがありません。

《未勸国東歌》

3494 子持山若鶏冠木の黄葉つまで寝もと吾は思ふ汝は何どか思ふ

子持山の若いカエデの葉が秋になって色づくまで、あなたと共寝をしたいと私は思います。あなたはどう思います？

3540 左和多里の手児にい行き逢ひ赤駒が足掻きを速み言問はず来ぬ

左和多里の乙女に出逢ったけれど、私が乗る赤毛の馬の歩みが速いので、言葉を交わさなまま来てしまいました。

《上野国防人歌》

4404 難波道を行きて来までと吾妹子が着けし紐が緒絶えにけるかも（上毛野牛甘）

難波への道を行って帰って来るまで御無事で、妻が着けてくれた紐が、長い旅で擦り切れてしまったことだなあ。

4405 吾が妹子がしぬひにせよと着けし紐系になるとも吾は解かじとよ（朝倉益人）

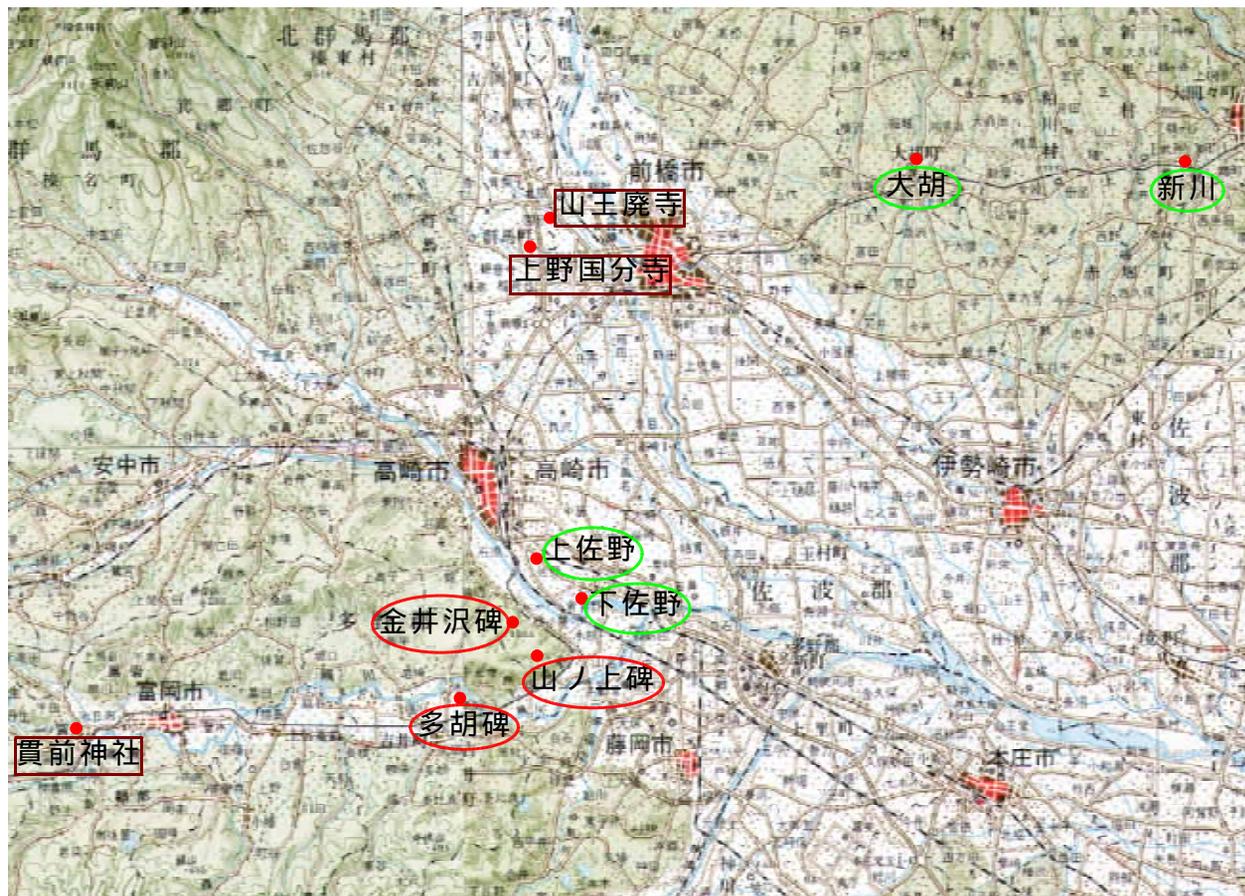
私の妻が、「私を思い出すよすがにしてください」と着けた紐は、たとえ擦り切れて糸のようになっても私は解くまいと思っているよ。

4406 吾が家ろに行か人も草枕旅は苦しと告げ遣らまくも（大伴部節麻呂）

私の家に行く人がいてくれたらなあ。そうすれば、旅はつらいと告げに行ってもらうのになあ。

4407 ひな曇り碓氷の坂を越えしだに妹が恋しく忘れぬかも（他田部子磐前）

碓氷峠を越える時に、妻のことが恋しく思われて、忘れることができません。



参考地図 1